



バードリサーチ ニュース

2010年4月号 Vol.7 No.4

Passer montanus
Photo by Watanabe Yoshiro

参加型調査

バードリサーチ 春の新調査 子雀ウォッチと外来鳥ウォッチ 植田 睦之

先月号で巣箱の調査のお知らせをしましたが、それ以外にも2つ調査がはじまります。最近話題になるスズメ減少の原因を探る「子雀ウォッチ」と分布変化が注目されている外来鳥の現状を探る「外来鳥ウォッチ」です。

子雀ウォッチ

バードリサーチには、しばしば、「スズメが減っているように感じるのだが・・・」という電話がかかってきます。岩手医科大学の三上さんが、各種情報をまとめたところ、ここ数十年で急激に減少しているのではないかとのことです(三上2009)。ではなぜ減っているのでしょうか？ 減少の原因としては、生まれる子が減っているか、あるいは死亡率があがっていることが考えられます。死亡率を調べるのは困難なので、「子雀ウォッチ」では、三上さんたちと共同で、生まれる子が減っているかどうかを調べます。



写真1. ヒナに給餌するスズメ。
[Photo by 内田博]

調査方法は2つ。1つは、つがいあたりの子スズメの数について調べる「親子調査」です。スズメの親子を見つけたら、何羽の巣立ちヒナを連れているか、親は両親でいるか片親かに注目してください。もう1つは、子スズメの割合をしらべる「子スズメの数の調査」です。10羽以上のスズメを観察して、その中に何羽の巣立ちヒナが混ざっているかをかぞえて下さい。つがいが育てる子の数は変わらなくても、捕食者のために繁殖に失敗することが多くなったり、巣場所が少なくして繁殖できるスズメが少なくなっているかもしれません。2つの調査結果を比べることで、また、様々な地域からの情報があつまることで、スズメの減っている原因が見えてくるのではないかと思います。

簡単な調査ですので、自宅や職場のまわり、出先などでスズメを見かけたら、子スズメがいないか注目して、ぜひ情報を送ってください。

■子雀ウォッチのページ

<http://www.bird-research.jp/kosuzume.html>

外来鳥ウォッチ

スズメが減っていたり、アオサギが増えていたり鳥の分布は変化していますが、そのなかでも変化が大きいもののひとつが外来鳥です。近年中国から移入し、定着したガビチョウやソウシチョウは全国的に分布を拡げています。逆に、大正時代に狩猟鳥として放され、全国に定着した外来鳥の先駆けともいえるコジュケイは最近減っていると言われています。

そこで、外来鳥の分布を調べてみようというのがこの「外来鳥ウォッチ」です。対象は国内で広く見られるガビチョウ、ソウシチョウ、コジュケイ、そして現在の分布は南西諸島の島嶼部に限られています。生態系への影響が大きいと考えられるインドクジャク、そしてコブハクチョウの5種です。



写真2. 電線にとまるガビチョウ。以前は数にいたる鳥でしたが、近年は大胆になって、電線など開けたところにも出てくる。

[Photo by 内田博]

この調査に使う情報収集システムは、今後、さまざまな鳥の分布調査に使っていくために新しく開発したものです。上記5種がいない地域の方も、このシステムを使っていた



図. 新システムの画面イメージ。

だいて、使いにくい点などご意見いただくと今後の改良に役に立ち、ありがたいです。外来鳥がいないという情報も重要ですので、今いる鳥を入力してみてください。

なお、この調査はこれまで外来鳥の情報収集をしてきた株式会社鳥類環境と一緒に進めます。「鳥類環境」のホームページからはガビチョウやソウシチョウの分布図も見ることができますので、ご覧ください。

■外来鳥ウォッチのページ

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/gairai/

■鳥類環境のページ

<http://www.torikan.co.jp/webgairaisyu/cont/index.html>

レポート

野生化カナダガンをカゴにもどそう！ ～丹沢湖のカナダガン捕獲大作戦の報告～

カナダガン捕獲大作戦実行グループ

日本野鳥の会神奈川支部 石井 隆
神奈川県立生命の星・地球博物館 加藤ゆき
(文責) かながわ野生動物サポートネットワーク 葉山久世

外来種カナダガン

シジュウカラガン大形亜種(以下、カナダガン)は北アメリカ大陸原産の水鳥で、観賞や展示目的で輸入されたものが逃げ出し、野生化しています。神奈川県山北町の丹沢湖では、1993年5月頃から観察され、95年以降繁殖を始め、現在11羽(2009年9月)が確認されています。国内では、富士五湖周辺にまとまった数が生息し(1985年以降増加、推定50～60羽)、ここからの分散個体が丹沢湖に定着したと考えられています。



写真1. 丹沢湖のカナダガン。

在来種シジュウカラガンとの交雑

カナダガンによる生態系への影響でもっとも危惧されるのは、在来種のシジュウカラガン小型亜種(以下シジュウカラガン)との交雑です。ガンカモ類は、なぜか異種間雑種を作りやすく、カナダガンでは飼育下も含めるとガンカモ類8種との間で雑種を作った事例が報告されています。

シジュウカラガンは江戸時代には関東一円にもごく普通に飛来していました。しかし、繁殖地に導入された毛皮用のキツネによって一時絶滅の危機に瀕しました。日本に渡ってくる千島列島の個体群を回復させるため、1983年にアジアでの羽数回復計画が日本雁を保護する会と仙台市八木山動物園により実行されました。日本、ロシア、アメリカの協力による、実に30年に及ぶ保護繁殖事業の努力が実り、日本へのシジュウカラガンの飛来数は増加しています。2007年には神奈川県でも1羽が確認されました。

日本に飛来するシジュウカラガンの営巣や産卵は千島列島などで行われますが、つがいの形成や繁殖に関連する行動は国内に滞在している2月下旬から始まります。遺伝的に近縁でも自然界では同所的に生息しないカナダガンを放置することは、その間、交雑のリスクも抱えることとなります。実際に交雑が起こるかどうかは、わかりませんが、ここは予防原則(悪影響が不確かだからといって後回しにせず、未然に対処すること。1992年に開催された国連環境開発会議で採択された環境と開発に関するリオ宣言の原則の一つ。)に則り、カナダガンを自然環境から除去し、シジュウカラガンとの分布重複を回避することが必要と私たちは考えました。交雑のリスクがなかったとしても、日本で野生化したカナダガンは飼い鳥が由来ですから、もう一度人の管理下に戻すことは人間が負うべき責務だと思えます。

カナダガン捕獲大作戦

私は04年頃から丹沢湖のカナダガンを何とかしたいと考えていましたが、捕獲しても引受先がなければ、安楽殺せざるを得ません。09年秋に捕獲個体を終生飼育してもらえ動物園の目処がついたことで、計画が進み始めました。

外来生物法で輸入停止や駆除等の対策が取られるのは特定外来生物のリストに入っている種だけで、カナダガンはこれには入っていません。そのため、鳥獣保護法では他の在来種の野鳥と同じく捕獲許可が必要という扱いになっています。そこで、生態系への被害防除を目的に有害鳥獣捕獲の申請をしました。環境省の指針では、外来鳥獣による被害防止の場合は積極的な有害鳥獣捕獲を図ることとなっていますが、神奈川県は、現時点では生態系への被害が明確ではないので許可できないとの判断でした。次に学術捕獲申請を行ったところ、学術捕獲で捕獲できるのは研究に必要な最低羽数なので全羽の捕獲は無理ということでした。外来種対策は予防が原則ですが、現行法で一気に捕獲対応するのは、県行政には決断が難しいようでした。県と協議した結果、推定生息羽数11羽のうち、7羽は捕獲後、動物園で飼育、飼育下での生態情報を収集する。残る4羽は個体識別のための足環(カラーリング)を装着し放鳥、野外での生態情報を収集するという2本立ての計画が認められました。今後得られる情報によっては、全羽捕獲を認められる可能性があります。

丹沢湖のカナダガンたちは既に人に良く慣れていましたが、捕獲前に4か月間ほど餌付けを行ないました。その間に、カナダガンの解説や捕獲の理由を描いたチラシを作成し、山北町やビジターセンターの協力を得て地域住民への周知をしました。捕獲はハンドリング技術を持った動物園やバンダーさんの協力のもと2月に2回実施し、9羽を捕獲することができました。7羽は、横浜市立野毛山動物園と他1園のご協力により終生飼育が予定されています。2羽はカラーリングを装着し放鳥しましたが、2010年2月22日現在、残りの2羽がまだ捕獲できていません。

私たちは、今回の丹沢湖での成功をきっかけに富士五湖地域や他地域のカナダガン対策が進むことを強く期待しています。捕獲後に飼育できる羽数にはおそらく限りがあります。対応を先送りしているうちに個体数が増えれば、殺処分しなければならなくなるかもしれません。そういう意味でも早急な対応が望まれます。



写真2. 捕獲したカナダガンをケージに運ぶ。

● 足環つきカナダガンの情報提供先

カラーリングのついたカナダガンを発見された方は、下記にお知らせください。

神奈川県立生命の星・地球博物館 加藤ゆき

E-mail: katoy@nh.kanagawa-museum.jp

Fax: 0465-23-8846



活動報告

ヒクイナの生息状況は回復しつつある？ ～調査からわかった生息状況の変化～ 平野 敏明

日本におけるヒクイナの生息状況は悪化していると考えられていますが、詳しい調査はほとんどされていません。そこで、バードリサーチでは日本におけるヒクイナの生息分布や生息環境を明らかにするために2006年4月から調査を実施してきました。この調査を通して分かった最新のヒクイナの生息状況について簡単に報告します。

繁殖分布の変化

ヒクイナの情報を収集するために、現地調査、アンケート調査、文献調査、聞き取り調査を実施しました。その結果、2006年から2009年の繁殖期にはヒクイナは、本州中部の内陸部や日本海側、北日本で生息が確認されない地域が多かったものの2府33県で生息が確認されました(図1-c)。一方、環境省の繁殖分布調査によると、ヒクイナは、1978年の繁殖期には北海道から沖縄県まで広く生息していました(図1-a)。ところが、1997～2002年の調査では、1道1府25県で生息が記録されたものの(図1-b)、全国的に生息地域が減少し、特に本州中部以北の地域での減少が顕著でした(環境省生物多様性センター 2004)。これらのことから、1978年以後ヒクイナの繁殖分布は縮小していましたが、近年では多少回復傾向にあると言えます。

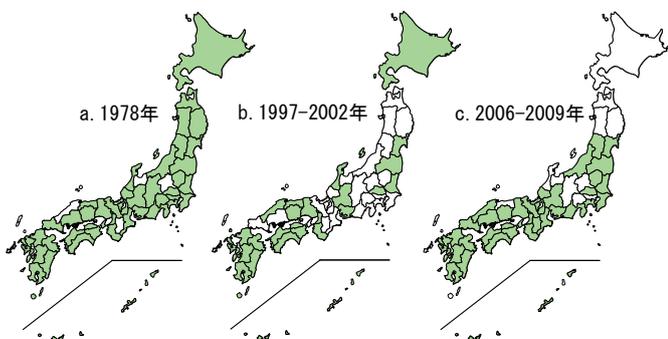


図1. 繁殖期におけるヒクイナの生息分布の変化。過去の生息分布は環境省生物多様性センター(2004)を基に描いた。

越冬分布の拡大

2006年から2008年の越冬期には、九州地方や四国、中国、近畿、東海地方、関東の一部の1都2府21県で生息が確認されました(図2-b)。1986年当時の分布は、九州地方と山口県で生息が確認されたに過ぎませんでした(環境省

図2. 越冬期におけるヒクイナの生息分布の変化。過去の生息分布は環境省(1988)を基に描いた。



1988, 図2-a)。したがって、越冬分布は本調査で得られた結果のほうが広範囲に渡っていることがわかります。そして、越冬分布拡大の傾向は、九州や中国地方などの西日本から徐々に東日本へ進行していることがみてとれます。

生息状況の地域的な偏り

生息記録は、繁殖期および越冬期とも近畿地方以西で多い傾向がありました。特に、記録が多い地域は、太平洋側や瀬戸内海地方、九州地方で、関東地方や東北地方では記録が少数しかありませんでした。このことは、関西から西の地域では生息個体数も多いことを示唆しています。実際、現地調査の結果、鹿児島県や奄美大島・沖縄地方の調査地点あたりの記録個体数は、関東地方より著しく多いことがわかりました(図3)。

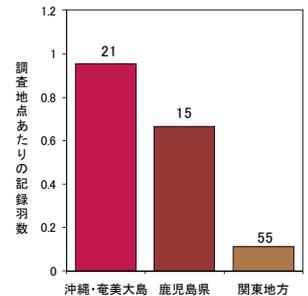


図3. 現地調査によるヒクイナの記録羽数の比較。

分布拡大は温暖化の影響？

以上のように、現在ヒクイナは、繁殖期および越冬期とも近畿地方から西の地域に多く生息していることがわかりました。ヒクイナは、東南アジアやインドなどに広く分布することから南方系の種と考えられます。そのため、分布の北の縁に位置する北日本より、西日本のほうが生息に適しているのかもしれませんが、また、越冬分布は1980年代初期に比べて西日本から東へ拡大しましたが、これは近年における温暖化の影響によるものかもしれません。今後、生息個体数が多い近畿地方以西の地域がヒクイナの供給源となり、現在生息数の少ない関東地方などでも良好な環境では生息数が回復するかもしれません。

その一方で、今回の調査でヒクイナの生息数が多かったいくつかの調査地では、湿地環境が消失し、生息が危ぶまれる情報が届けられています。このことは、現在ヒクイナが生息している地域でも、場合によっては環境の改変にともない生息状況が悪化することを示唆しており、まだ予断を許さない状況にあると言えます。

バードリサーチでは、越冬分布の拡大の動向も含め、今後も生息状況をモニタリングしていきたいと考えています。今後もヒクイナ調査にご協力いただければ幸いです。

本調査を行なうにあたり多くの方々からご協力をいただきました。紙面の都合でお名前を掲載できませんが、お礼申し上げます。

引用文献

- 環境省. 1988. 第3回基礎調査動植物分布調査報告書鳥類.
http://www.biodic.go.jp/reports2/3rd/ap_bird/3_ap_bird.pdf.
環境省生物多様性センター. 2004. 第6回自然環境保全基礎調査 鳥類繁殖分布調査報告書.
http://www.biodic.go.jp/reports2/parts/6th/6_bird/6_bird_16.pdf.

ルリカケス 英:Lidth's Jay 学:*Garrulus lidthi*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 カラス科

全長: 約38cm 露出嘴峰長: 29.5-42.2mm (n=21)
 ふ蹠長: 42.1-46.3mm (n=6) 自然翼長: 169-178mm (n=6)
 尾長: 92-116mm (n=15)
 体重: ♀ 170.5-194.7g (n=16) ♂ 164.8-210.4g (n=26)
 ※ 全長は吉井(監)1988, 体重は川路則友氏により, その他は著者による標本および野外測定値。

羽色:

目より後ろの頭から首, 風切の軸外側, 雨覆, 尾の羽毛は金属光沢のある濃い瑠璃色, 上部を除く胴の羽毛は赤みの強い栗色. 頭の目から先と風切軸内側, 翼と尾の下面の羽毛は黒. 雨覆と風切の瑠璃色部, 尾の上面には黒縞. 喉に細い白縦斑, 風切羽端と尾羽端は白. まれに, 尾羽などの部分白化個体がいる. 目は焦げ茶色, 嘴は象牙色, 脚と指は黒灰色.



写真1. ルリカケス.
[Photo by 高美喜男]

鳴き声:

ジャージャー(主に警戒時), キュリュイキュワア, キュワア, クルワア(ねぐら出入時, 親子鳴き交わし等個体間連絡), などと聞こえ, 強弱や音程の高低の異なる多彩な声を発する. 大きな巣内雛が出すズジャーズジャーの声は, 親鳥の声よりも著しく機械的で鋭く, ガラガラヘビの出す音やシマリスの幼児が発する擬音に共通する要素を持ち, おそらく同様に一部の捕食者を怯ませる機能も持つ.

2. 分布と生息環境

分布:

鹿児島県の奄美大島と, 隣接する加計呂麻島, 請島, 枝手久島で繁殖している. 1万年余り前の同形態の骨の化石は, 沖縄島南部から出土している (Matsuoka 2000).

生息環境:

照葉樹天然林, リウキュウマツの混じる二次林が主な活動場所. 木立から100~200m程度離れた人家, 納屋, 畑地などにも飛来する. 照葉樹高木の樹冠でねぐらをとる. 若鳥が林道上の電線に集まって, ねぐらをとることもある.

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 繁殖システム: 繁殖期 非繁殖期

一夫一妻の巣が多いと考えられるが, ヘルパーの存在も確認されている.

巣:

樹洞(根元を含む), 木の枝の中や着生シダの茂みの中, 崖や斜面の窪み, 人家の軒下, 屋内など色々な場所の物陰に造巣する. 巣は細い枝や蔓を材料にした直径30~50cmの台座に, 細い枯れ草の内径10cm余りの産座を造る. 大多数は1月後半から2月前半に造巣する. 早

ければ12月後半の暖かい日から巣材を運ぶ姿が見られ, やり直しの造巣は5月まで見られる.

卵:

卵はごく薄い水色で斑はない. 長径約32mm, 短径約24mm(未孵化卵, 冷凍保存標本による).

抱卵・育雛期間・巣立ち率:

雌雄とも抱卵と育雛を行なうが, 役割分担は未確認. 1日1卵, 朝~昼頃産卵する. 一腹卵数は2~6卵で, 4卵が最頻値. 最終卵を産む前に抱卵に入り, 一腹内の体サイズが異なる非同時孵化. 抱卵期間は約17~20日程度, 巣内育雛期間25日程度, 捕食者等の影響で早く巣立つことがあるらしい. 抱卵, 育雛とも, 日数に幅がみられ, 巣内の一部の卵の未孵化や, 一部のヒナの死亡(おそらく餓死)がみられる. 孵化後の卵殻やヒナの死体はすぐに運び出される(親鳥が食べている可能性も否定できない.)ヒナへの給餌物は, 飲み込んで来て吐き戻して与えられる. 群れや繁殖個体の構成員比は未確認. 若鳥の群れが6月頃から確認できる.



写真2. 巣箱の中の卵.



写真3. 餌ねだりするヒナ.

4. 食性と貯食行動

雑食性で節足動物(昆虫類, クモ類等)や, 脊椎動物(は虫類, 鳥類等), 植物の果実, 種子, サツマイモなどの農作物などなんでも食べる. スダジイやアマミアラカシなどのドングリを好み, ドングリの結実時に, 食痕が多数見られる. 樹上および地上で採食する. アマミアラカシを地面に貯食する(隠す)行動も観察されている. ドングリを6個, 喉袋と嘴で運んでいた確認例がある.



写真4.
自動カメラで撮影した.
地上でよく活動する.

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 捕食者

ハブの胃からしばしばルリカケスが出てくること, ルリカケスが営巣中の巣にハブがいたこと, ハブ咬傷のある死体が取得されたことなどから, ハブは重要な捕食者の1つと考えられる. ルリカケスの巣から卵をくわえだすカラスが目撃されたこと, 繁殖期を中心に, サシバとハシブトガラスに対してモビング行動が見られることから, この2種も重要な捕食者の可能性がある. このほか, 侵略的外来種のジャワマンゲースがルリカケスの巣を襲ったという報告がある.

● スダジイのドングリが繁殖成績を左右

奄美大島の森林の樹冠で優占しているスダジイ(オキナワジイ)のドングリがなっているときには, まだ緑色でも成熟

してさえいけば、ルリカケスが多く樹上に群れており、地上にはちぎられたドングリが多数落ちている。スダジイのドングリの結実量は年変動が大きく、翌年のルリカケスの繁殖成績に大きな影響を与えていることがわかってきた(図)。主に地上でドングリを食べるクマネズミ等にくらべると、樹上でドングリを先取りするルリカケスのほうが、凶作の影響は小さいと推定されるものの、一方で凶作だとほかの動物も飢えており、巣が捕食される頻度が増える傾向がみえてきた。

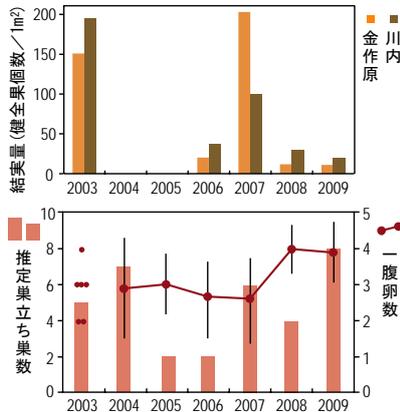


図2. バケツトラップによるドングリの結実量(上)と、ルリカケスの繁殖(下)の関係。推定巣立ち巣数は巣箱10個の調査にもとづく。2004年、2005年のドングリ凶作が2005年、2006年の巣立ち成功に影響を与えている。

● ヘルパーの存在、種内卵破壊の可能性

ヒナを標識する際、巣内では警戒声を出したり、体を伏せたりするが、巣から取り出した後には口を開けて餌ねだり行動をとり、置くと調査者の足下などに身を寄せる。家族群と考えられる数羽の群れが頻りに観察され、ヘルパーの存在も確認されていること、多様な声で鳴き交わすことなどから、社会性が発達していると考えられる。2008年と2009年の巣箱での調査で、卵が一度なくなった後で再度産卵され、抱卵行動が続いた例が3例ある。捕食による卵の消失ならば通常、巣は放棄されるので、ドングリキツツキやフロリダヤブカケス(Garvin *et al.* 2002)で報告されている種内卵破壊の行動が、ルリカケスにおいても起こっている可能性が示唆された。ただし、再産卵がみられたいずれの巣も巣立ちまでは至らなかった。長年にわたる詳細な個体群研究のあるフロリダヤブカケス(Woolfenden & Fitzpatrick 1984, 1991)等との共通点や相違点の比較も興味深く、標識個体と遺伝分析による研究の進展が待たれる。羽毛とくちばしの色彩やDNAの一部塩基配列の特徴から、ルリカケスはインドカケス *Garrulus lanceolatus* にもっとも近縁だと考えられ(山階 1941, 梶田ら 1999, Asimova 2007), 両種は遺存固有種だと推定される。

● 保護の歴史

19世紀末から20世紀初頭に、輸出する帽子飾り用羽毛のための捕獲で個体数が減り、1921年に国の天然記念物に指定され、保護された。分布域が狭いことと、森林伐採の急速な進行やジャワマングースの分布拡大によって個体数の減少が懸念され、環境省の特殊鳥類・絶滅危惧種に指定されていたが、林業が衰退して森林植生が回復したことや駆除事業の進展でマングースの生息密度が低下したこと、分布域内で元気に繁殖していることなどから、2008年度に絶滅危惧種の指定は解除された。

● 生態系管理の旗艦・指標種、域外保全など

ルリカケスは、分布域が限定され、顕著な生態的、進化上の特徴が認められ、美しい羽毛や興味深い習性を多く持ち、奄美大島では人家の側や中でも営巣するなど身近な存在なので、生物多様性保全や生態系管理の旗艦・指標種として位置づける価値があると私は考え、研究を進めている。小個体群の生物にとっては、外来の疾病がしばしば顕著な絶滅危惧要因となるので (Fujisaki *et al.* 2008), 疾病や、その危険性低減のための個体群保全の取り組みのモデルとしての早めの域外保全 (Connolly & Cree 2008) 手法の開発についても共同研究を進めている。

6. 引用・参考文献

Akimova, A., Haring, E., Kryukov, S., & Kryuko, A. 2007. First insights into a DNA sequence based phylogeny of the Eurasian Jay *Garrulus glandarius*. *Экспресс-выпуск* 356: 567-575.

Fujisaki, I., Pearlsine, E.V. & Miller, M. 2008. Detecting population decline of birds using long-term monitoring data. *Population Ecology* 50: 275-284.

Garvin, J., Reynolds, S.J. & Schoech, S.J. 2002. Conspecific Egg Predation by Florida Scrub-Jays. *Wilson Bull.* 114: 136-139.

Connolly, J.D. & Cree, A. 2008. Risk of a late start to captive management for conservation Phenotypic differences between wild and captive individuals of a viviparous endangered skink (*Oligosoma otagensis*). *Biol. Cons.* 141: 1283-1292.

梶田学・川路則友・山口恭弘・Khan, A.A. 1999. ルリカケス *Garrulus lidthi* の系統関係について - DNA解析と形態の両面から -, 日本鳥学会1999年大会講演要旨集, 日本鳥学会.

Matsuoka, H. 2000. The late Pleistocene fossil birds of the central and southern Ryukyu Islands, and their zoogeographical implications for the recent avifauna of the archipelago. *Tropics* 10: 165-188.

Woolfenden, G.E. & Fitzpatrick, J.W. 1984. *The Florida Scrub Jay, demography of a cooperative-breeding bird*, Princeton University Press, Princeton, 406pp.

Woolfenden, G.E. & Fitzpatrick, J.W. 1991. Florida scrub jay ecology and conservation. In: Perrins C.M., Lebreton J.D. and Hiron G.J. (eds.), *Bird Population Studies, Relevance to Conservation and Management*, Oxford University Press, Oxford: 542-565.

山階芳麿. 1941. 日本生物地理学会誌 3: 319-328.

7. 参考ホームページ

石田研究室, 奄美大島の生態系管理と固有鳥類のページ
<http://forester.uf.a.u-tokyo.ac.jp/~ishiken/japanese/amami/index.html>

執筆者

石田 健 東京大学大学院農学生命科学研究科 准教授

奄美通いは23年目。奄美野鳥の会の協力を得て、オオトラツグミのさえずり個体数調査は21年目、巣箱を使ったルリカケスの生態研究は8年目になる。スダジイのドングリの結実動態、植生プロット調査、クマネズミの個体数変動など、奄美の森林生態系の研究と管理に取り組んでいる。



レポート

CCC 行徳とその周辺でのカワウ調査

東京農工大学 高階 あゆみ

CCCとは？

CCCとは、Christmas Cormorant Countの頭文字を取った呼び名で、簡単に言えば「クリスマスにカワウをカウントする」ことを目的としたイベントです。元々は、関東最大規模のコロニーがある行徳鳥獣保護区にて行われていたカワウの採食地調査が起源なのですが、徐々にイベント的要素も加わり、学生や一般市民の方々、研究者など調査経験に関わらず様々な人が参加することのできる調査イベントとなりました。昨年12月の調査で7回目を数えます。

CCC2009 カワウ尽くしの一日

2009年12月20日の朝6:00。参加者たちは行徳周辺に置かれたおよそ20か所の定点に分かれ、調査を開始しました。調査方法は、カワウが飛来、飛去する方向や着水した位置とその時間を記録するだけという至ってシンプルなものであるため、調査経験の浅い方にも大いに活躍して頂くことができました。

調査だけでは終わらないのがCCCです。早朝調査が終わって一息つくと、午後からはカワウに関するシンポジウムが行われました。CCCやカワウについて説明するといった根本的な話に始まり、カワウの被害問題、行徳コロニーのカワウ、さらにカワウがどの魚を食べているのかなど、貴重なお話をたくさん聞くことができました。

シンポジウムが終わると、早朝調査では暗かったり、飛んでいる姿だったりしてよく観察できなかったカワウをじっくり見てみよう！ということで、行徳鳥獣保護区内にてカワウコロニー観察会が行われました。

そして一日の締めくくりとして、クリスマス会が行われました。この場では早朝調査の結果をCCC 2009実行委員のメンバーでまとめて、ごく簡単に発表しました。そして、クリスマス会終盤に行われるメインイベント「プレゼント交換」は、サンタガールが登場して参加者にプレゼントを配るといったのが毎年恒例なのですが、今年はなんとサンタガールが2人も、さらにトナカイまで登場してプレゼントを配ってくれ、例年より何倍も盛り上がりました。こうして、カワウについて様々なことを知ることのできた、まさにカワウ尽くしの一日が終了しました。

以上、当日の様子についてごく簡単にご報告させて頂きました。

写真1.
クリスマス会の様子。
[Photo by 石亀明]



CCC早朝調査の目的

関東最大規模である「行徳カワウコロニー」のカワウたちが、一体どこで採食しているのかということを知るのが、CCCの早朝調査における主な目的です。海で採食できる魚の量の季節的な変化などから「関東のカワウは、夏は海で、冬は川で採食する」という話をよく耳にしますが、CCC

の早朝調査では行徳周辺を流れる荒川、江戸川、旧江戸川の各水系を中心に定点を配置することで、カワウの採食地を細かく調査します。



写真2.
江戸川から旧江戸川が分岐しているあたりで観察されたカワウの群れ。 [Photo by 野長瀬雅樹]

CCC早朝調査の結果

まず結果から言うと、行徳コロニーのカワウたちは、コロニーを出発すると大半の個体は北の方角へ向かい、やはり海ではなく、河川で中心的に餌を取っている傾向にあることがわかりました。ちなみに、昨年度CCCにおける早朝調査の結果もほぼ同じような傾向を示しています。今回の調査では海での採食が全く見られなかった訳ではありませんが、やはり川での採食の方が圧倒的に多く観察されました。地図を見て頂くと一目瞭然です。

また、今年度の調査では表のようにカワウの群れの軌跡が綺麗につながりました。時間や群れの羽数などから、おそらく同じカワウたちであろうと考えられます。カワウがコロニーを出てからどこへ向かい、どこで採食して、どのようなルートを進んで再びコロニーへ戻ってくるのかといった最も大きな疑問が調査によって浮かび上がり、とても興味深い調査結果となりました。この場をお借りして、CCC2009に参加して下さいました皆様へ感謝申し上げます。



図.
定点の地点とカワウの着水が見られた場所。数字の地点は大きな群れが見られた場所で、表の記録と対応する。

表. 大きな群れが観察された時刻と地点。

観察時刻	記録
6:47	約300羽の群れが保護区を出発し、北へ向かって地図中①の地点で着水
7:28	地図中②付近で約390羽の群れを確認
7:30	地図中③付近で約400羽の群れが採食
8:10	地図中④付近で約345羽の群れを確認
8:12	地図中⑤付近を約400羽が南下
8:40	地図中⑥で約540羽の群れが東に向かう様子を確認 そのすぐ後約200羽が保護区へ帰還

学会情報

第21回北海道鳥学セミナー 参加報告

北海道大学水産学部(函館キャンパス)で3月6日に開かれた第21回北海道鳥学セミナーに参加してきました。発表数は学生7題, 研究者4題の計11題あり, 参加者は20余人でした。主に道内の3大学から参加した学生が多かったです。三部構成で, 部ごとに総合討論と休憩を入れ, 2008年度鳥学会大会の発表形式を活用した形でした。

第一部は「人工給餌によく集まるユリカモメの幼鳥(平田和彦)」や「ヨーロッパヒメウの利用底質の比較(北原祥)」など水鳥について, 第二部は「ヒバリの生息地評価(馬淵良子)」, 「ヒヨドリの寄生虫相と地理的特色(吉野智生)」から「北海道大学植物園・博物館の鳥類標本(加藤克)」まで, 身近な陸鳥とその標本について, 第三部では「天売島におけるウミガラスの繁殖状況(長谷部真)」から「ウミネコ個体の様々な繁殖特性の経年的反復性(風間健太郎)」など海鳥についての発表がありました。中には学部生の発表もあり, 卒業研究の計画をセミナーで話し, 意見をもらうというスタンスの積極的な学生が増えていて, 北海道における鳥研究の将来が楽しみに感じられました。また, こじんまりした会で, 発表者と参加者が近いこと, 顔見知りが多いこともあり, 活発な意見交換がされていて, とても良いと思えました。



写真 北海道鳥学セミナーの会場風景。

マガモやカルガモが都市部でも普通に見かける鳥になって久しいですが, 1980年代に初めて札幌の都心部でマガモが人前に姿を現した時の経緯をまとめたのが, 「札幌におけるマガモ定着の経緯(小川巖)」の発表です。当時を知らない若い参加者は鳥類の行動や分布の変化が起こることを知って驚いていました。また, バードリサーチからは黒沢が「カラスにおける遊び行動」をレビューしました。遊びは「生活に直接関係なく, また機能も半端な行動を自発的に始める」などの定義をして「雪滑り」, 「電線ぶら下り」, 「テニスボール投げ」などの事例を紹介したのですが, 足で電線につかまって鉄棒のように一回転する「カラスの大車輪」を見たという参加者が2名もいて, おどろきました。私は参加できなかったのですが, 翌日曜には, フェリーに乗船しての豪華なエクスカーションがあり, キタオットセイやウトウ, ウミアイサの群れが観察されたそうです。【黒沢令子】

第57回日本生態学会大会 参加報告

3月15~20日の日程で東京大学で開催された第57回日本生態学会大会に参加してきました。駒場キャンパスでの開催だったので, バードリサーチからは京王線で30分ほどで行けました。

鳥学会と比べてしまうと, やはり生態学会は発表数も参加者も多く, 口頭発表の会場が9か所もあって目移りします。でも, 鳥関係の発表は15題ほど。プログラムにマーカーで印をつけて, 狙い撃ちでいくつか聞いてきました。その一つは, カワウのコロニーでの森林の衰退と回復についての調査方法に関するものです。カワウのコロニーでは, しばしば生息密度が高くなって年数が経つと, 樹木の枯死が進みますが, その後生息密度が下がることもあって, 樹林が復活することがあります。しかし, それはとても長い時間をかけて変化してくるものなので, 過去にさかのぼって調査することが必要になります。琵琶湖博物館の亀田さんたちは, 空中写真と文献や地元への聞き取り調査でこの問題を解決しようと試みました。その結果, これらの情報から, コロニーの範囲の変遷やその時どんな管理が行われていたかを知り, 比較して調査するという方法が有効だということがわかったという発表でした。国土交通省が空中写真をインターネットで公開しているので, 同じようなアプローチが皆さんでも可能です。自宅周辺を見てみるだけでも面白いので, 一度ご覧ください。

■国土変遷アーカイブ <http://archive.gsi.go.jp/airphoto/>

また, ポスター発表も1038題もありました。鳥関係だけ駆け足で見て回りましたが, ひとつその中でも面白かったと思った発表は, 東大の松田亜希子さんたちの「恋も浮気もお天気次第?」という副題のついたルースコロニーで繁殖するツバメの研究です。なんでも, 雨が降るとコロニーにいるオスが増えて, つがい相手ではないオスがメスに近寄ってくる頻度が増え, 本来の旦那様が奥様をガードしきれなくなっていたそうです。天候とつがい外交尾という一見無関係に見える2者の関係に切り込む面白い研究だと思いました。

生態学会では口頭発表のほか, 多数のミニシンポや自由集会在が組まれているのも特徴だと思います。今年はカワウの自由集会在があったので, そこに参加してきましたが, ロガーを用いた研究や, 精力的なフィールドワークによる研究, アユの放流地点とカワウのねぐらの個体数の関係を解析した研究など, 興味深い話をいくつも聞けました。

【高木憲太郎】

バードリサーチニュース 2010年4月号 Vol.7 No.4

2010年4月21日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎

表紙の写真: スズメ